
The catcher in the rye

北川瑞山

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

The catcher in the rye

【著者名】

N・D・カーティス

北川瑞山

【あらすじ】

あの不朽の名作『ライ麦畠でつかまえて』を日本文学調に翻訳。
J・D・サリンジャー作、北川瑞山訳。

1 (前書き)

あの不朽の名作『ライ麦畠でつかまえて』を日本文学調に翻訳。
J · D · サリンジャー作、北川瑞山訳。

最初に語るべき事があるとすれば、それは恐らく私がどこで生ま
れたとか、私の惨めな幼少時代はどんな風だったとか、私の両親が
どんな職業で、私の生まれる前はどうだったとか、所謂デヴィッド・
クーパーフィールド風の取るに足らない事であるかも知れない。だ
が私はそれらについて語ろうとは思わない。第一に、それは私にと
つて非常に退屈であるし、第二に、両親が彼らの個人的な事情を語
ろうとすると揃って脳溢血を起こすほど逆上するであろうからであ
る。彼らはこの手の事柄に関しては異様に神経質になつてゐる。特
に父がそうである。彼らは概して良い人だ。私が言つのはそういう
類の話ではなく、彼らは一人とも馬鹿みた様に神経質だということ
である。それに、私は自分の略歴や何かについて多くを語らないで
ある。ただ、私の体調が優れずにここに来て安静にしなけれ
ばならなくなる前に私の身に起こつた馬鹿な出来事について語りた
いだけなのである。というのは、私の兄、D·B·について、とい
うことになる。彼はハリウッドに住んでいる。こんな寂れたところ
からでもそう遠くはない。彼はよく週末に私を訪ねてやつてくる。
来月あたり私を車に乗せて家まで送つてくれるだろう。何しろ彼は
ジャガーを手に入れたのだから。時速200マイルで走行できる英
国の車である。恐らく4000ドルはしたのではないだろうか。彼
は今や大金持ちなのだ。以前はそうではなかつた。彼は家にいた頃
は、ごく普通のライターに過ぎなかつた。彼は素晴らしい短編を書
いていた。もしかすると聞いた事がないかも知れないが、『秘密の
金魚』というのはその一つである。小さな子供が自分の小遣いで買
つた金魚を誰にも見せようとしない、という筋書きだ。これには私
も打ちのめされた。今、彼は俳優になる為にハリウッドに出てゐる。
もし私の嫌悪すべきものがあるとしたら、それは映画に他ならない。
私の前で映画について言及する様なことはしないでほしい。

私が話したいのは、まずペンシー・プレッップを去った日の事である。ペンシー・プレッップはペンシルバニアのエイジャーズタウンにある学校である。多分聞いた事はあるだろう。恐らく何処かで広告を見たに違いない。あの学校は何千という雑誌に広告を出している。それもむさ苦しい男が馬に乗つてフェンスを飛び越えようとしているものばかりだ。あたかもペンシーではいつでも乗馬の光景が拌めると言わんばかりである。実際にはあの界隈で馬などどこにもない。その上その絵の下にはこう書かれている。

「1886年より、当校では素晴らしい、聰明な若者を育成し続けております」

とんでもない話だ。ペンシーが他の学校よりも素晴らしい聰明な若者を育成などしている訳がない。何しろ私はそのような人物を一人として知らないのだ。恐らく一人くらいのものだろう。多く見積もつてである。尤もその一人でさえ、ペンシーに来た時から既に素晴らしい聰明だったのであろうが。

そういうえば、フットボールの試合がサクソンホールで行われた土曜日の事だ。その試合はペンシーにとってとてつもない一大行事だつたに違いない。その試合はその年の最後の試合であり、ペンシーが負けようものならいつそ自殺でも何でもしてやるつかという雰囲気だつた。私は午後三時頃、トムセンヒルの上の独立戦争の時に使われた大砲の脇に立つていた。競技場全体を、そこからは見渡す事ができた。二つのチームが至る所で互いにせめぎあつてするのが見えた。応援席の方はよく見えなかつたが、それでも彼らが喉のかれんばかりのひどい叫び声をあげているのが聞こえた。私以外の全校生徒がそこにいた訳だ。それに比べてサクソンホール側は惨めで消沈して見えた。向こう側はそれほどの数の人員を連れてこなかつたと見えた。

フットボールに試合に、女子はそれほど来ていなかつた。年長の生徒だけが、女子を連れてきていいことになつていて。どう見てもおかしな学校だ。せめて女子の二三人はいるようなところに行きた

かつたものである。それがただ腕を搔くとか、鼻をかむとか、さもなければくすくす笑うだけの娘であつたとしてもだ。セルマ・サーマーは校長の娘で、こここの試合をよく見に来ている。とは言え彼女は劣情を激しくかき立てる様なタイプでは、特にない。それでも良い娘だ。私はエイジヤーズタウンから出るバスで彼女の隣に座り、それとなく会話を交わした。私は彼女が好きだった。彼女は確かに鼻が大きいし、爪は全て噛み締められた跡が残つていて、胸の詰め物があちらこちらをむいている様な感じではある。しかし彼女には一種の哀愁を感じさせる様なところがあつた。何より彼女の良い所は、自分の父親が如何に偉大であるかということについてあまり多くを語らない所だ。彼女は父親が如何に卑俗な人物であるかを知つていたのだと思われる。

何故私が応援席ではなくトムセンビルなどに立っていたかと言つと、フェンシングのチームと一緒にニューヨークから戻つてきたところだつたからだ。馬鹿げた事に、私はフェンシングチームのマネージャーだつたのだ。大した話だ。私達はマクバーー校との交流試合の為に、朝からニューヨークに出向いていた。ただ、試合は行わぬなかつた。というのも、私がフォイルとかそういう武具一式を地下鉄の中に置き忘れたからだ。これは何も私だけのせいという事もあるまい。なぜなら私はどこで降りれば良いのかということのために、終始地図を見ていいなければならなかつたのだから。しかしながら私は夕刻ではなく、たつた一時間半後にペンシルに戻つていた。帰り道ではチーム全員が私を無視していた。まあ今となればそれも笑い話である。

私が応援席にいなかつたもう一つの理由は、歴史の先生であるスペンサー先生にお別れをしなければならなかつたからだ。先生はすつかりインフルエンザにかかるついて、クリスマス休みが始まるとではもう会えないだらうと思つたからだ。先生は私が帰省する前に一度会つておきたいと手紙をよこしてもらつた。先生は私がもうペンシーには戻らない事を知つていたのだ。

言い忘れていた、私は放校処分になったのである。つまりクリスマス休みの後には、私が当校することはないとのことだ。四教科に落第したのに、私にはちつともやる気がでなかつたのだ。学校側は身を入れて励む様、度々私に警告した。特に中期は散々言われた。またその時にサーマー校長の元へ両親が呼び出された。それでも私はやる気が出なかつた。それで私は引導を渡されたという訳だ。ペンシーではかなり頻繁に引導が渡される。ペンシーは学業成績がいいことで通つているのである。これは本当の話だ。

で、十一月の事だつた。魔女の乳首の如く冷え込んだ日で、特に馬鹿高い丘の上は寒かつた。私はリバーシブルコートを着ていただけで、手袋やその他は身につけていなかつた。その前の週に、私は誰かに部屋に置いていたキャメルのコートを盗まれたのだ。毛皮の付いた手袋もポケットに入れていた。全くペンシーはこそ泥で溢れかえつている。ペンシーの人間は大抵裕福な家の出身なのだが、それでもこそ泥だらけなのだ。いや、思うに裕福な土地柄ほどこそ泥が多いに違ひない。これは冗談ではない。という訳で、私はその酔狂な大砲の脇で試合を見下ろしながら、寒さに尻をすぼめて震えていた訳だ。ただ私は何も試合がみたかったというのではない。私はただその辺りをうろついて、惜別の念に駆られようとしていたのである。私は学校やいろんな場所を立ち去るとも無く立ち去つてきたが、それは悲しい事だ。悲しい別れにせよ仕様も無い別れにせよ、自分がそこを去ることくらいは自覚しておきたいものである。そうしないと何となく気分が塞ぐ。

私は好運だ。不意に私にはここを去るのだという実感が湧いてきた。同時に私は思い出した。ある十月の日、私とロバート・チエンナーとポール・キャンベルは校舎の前のフットボールを蹴りあつていた。彼らは良い奴だつた。特にチエンナーはそうだ。それは夕食前の事で、辺りは次第に暗くなつてきていたが、私達は構わずボールを蹴り続けていた。終いにはボールも見えにくくなつていたが、それでも私達はやめなかつた。しかし結局は止めなければならなく

なった。というのも生物教師のザンベジ先生が校舎の窓から顔を出して、寮に戻つて夕食の準備をするように言ったからだ。しかしそうきつかけさえあれば、別れなければならないという実感が湧いてくるものだ。少なくとも大方の場合には。私はそれで踵を返し、スペンサー先生の家を向かつて丘の裏手を駆け下りた。彼は学校に住んでいる訳ではない。アンソニー・ウェイン・アーベニューに住んでいるのだ。

私は正門までの道を走り過ぎ、息を整えた。実際のところ、私はすぐに息切れがしてしまう方だった。私はヘビースモーカーだったのだ。少なくとも以前は。今は止めさせられている。ついでに言っておくと、私は去年六インチ半も身長が伸びた。そのせいもあって、私は結核かなにかに罹つてしまい、検査やら何やらをする為にここへ来たという訳だ。

で、息を整えると私はすぐに204号線を走り抜けた。道は氷結していて、危うく滑つて転んでしまいそうだった。何故走らなければならないかは自分でもよく分からなかつたが、恐らくただそしめたかったのだとと思つ。道を渡り終えたとき、何だか私は消えてしたい様な衝動に駆られた。うら寂しい午後、酷く寒くて日照はない。こんなとき道を渡つているといつも消えてしまいたくなる。

まあそれはそうと、私はスペンサー先生の家に着くと、ドアベルを勢いよくならした。私は本当に凍え死にそうだつた。耳は千切れそうだつたし、指も殆ど動かなかつた。「早く早く」私は大きな声で言つた。「誰か、早く開けてくれよ」遂にスペンサー先生の奥さんが空けてくれた。彼ら夫婦はメイドを雇つていなくて、いつも自分達でドアを開けなければならなかつた。それほど生活に余裕がある訳ではなかつたのだ。

「ホールデン！」奥さんは言つた。「会えて嬉しいわ！さあ、中に入つて！凍え死んじゃうわよ？」彼女は私に会えて嬉しい様であつた。私は彼女に好かれているのだろう。少なくとも私はそう思う。そんな訳で、私は家になだれ込んだ。「お元気でしたかスペンサ

ーさん？」私は言った。「スペンサー先生はいかがですか？」

「『トートを預からせてちょうだい』彼女は言った。スペンサー先生について私が訪ねたのが、彼女は聞こえなかつたようだ。耳が遠いのだろう。

彼女はクローゼットにかけた。私は髪の毛を手でかきあげていた。私はこまめにクルーカットにしていたから、櫛は必要なかつた。「いかがお過ごしでしたか、スペンサーさん？」私はもう一度言つた。彼女に聞こえる様に大きな声で。

「私は元気よ、ホールデン」彼女はクローゼットのドアを閉めた。「あなたはどうなの？」彼女のその聞き方からして、もう私が放校処分になつた事を彼女は知つていていた。

「元気です」わたしは言った。「スペンサー先生はどうですか？まだインフルエンザは治りませんか？」

「治つたわよホールデン！もうすっかりよくなつた様に見えるわ。でも何て言えば良いのかしら…。彼は部屋にいるわ。さあ、行ってみましょう」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9218y/>

The catcher in the rye

2011年11月27日16時46分発行